

第2章 商品売買

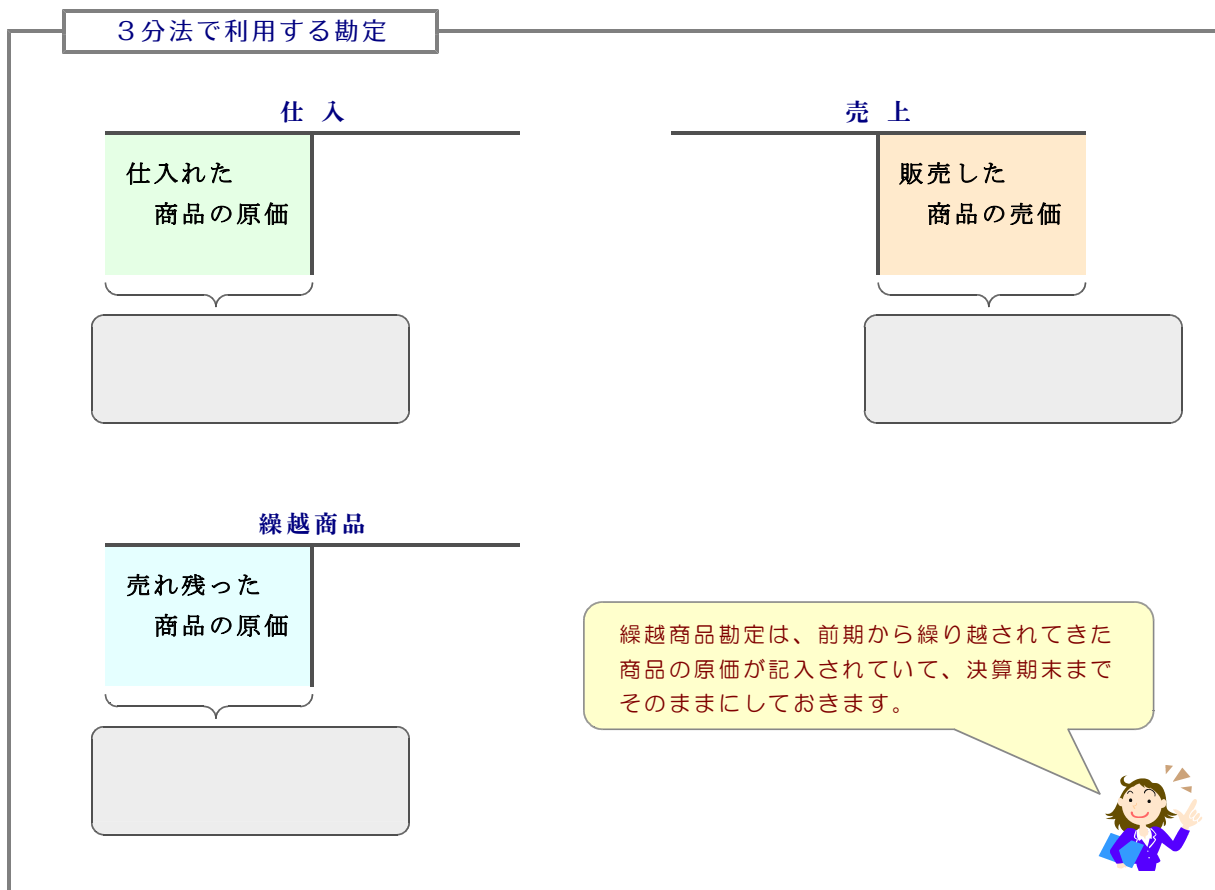
商業簿記が前提とする商業において、日々最も繰り返される取引が「商品売買」です。安く仕入れた商品を高く販売して、その儲け（粗利）から従業員への給料や賃借料、光熱費などを支払っていきます。本章では、期首商品がない場合の商品売買、及びそれをもとにした簿記一巡の手続きを学習します。

1. 商品売買の仕訳

当店は、製薬会社から医薬品を仕入れて、これを薬局に販売する問屋を経営しています。

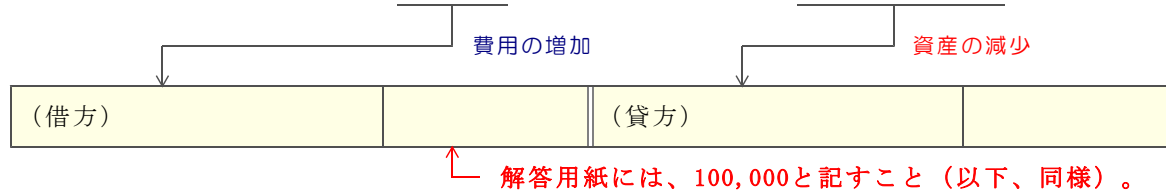


商品売買の仕訳は、繰越商品、仕入、売上の3つの勘定を用いる三分(割)法で行います。



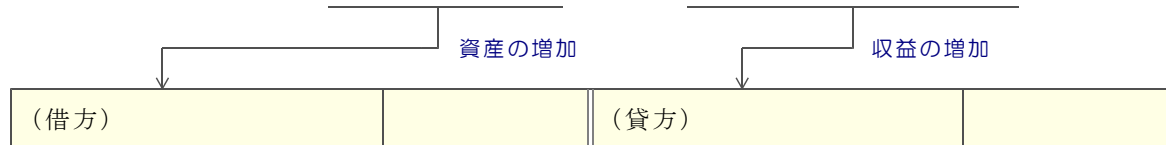
1-1 現金で仕入れ、現金で販売した場合

- (1) ①100円/個の商品を 1,000個仕入れ、その代金 100,000円を現金で支払った。



商品を仕入れた場合、「資産が増加した」と考えることもできます。しかし、商品が販売されると、仕入原価は、「収益獲得のために犠牲にされたコスト」になるため、三分割法では、これを先取りするような形で、仕入時に「費用が増加した」とものとします。

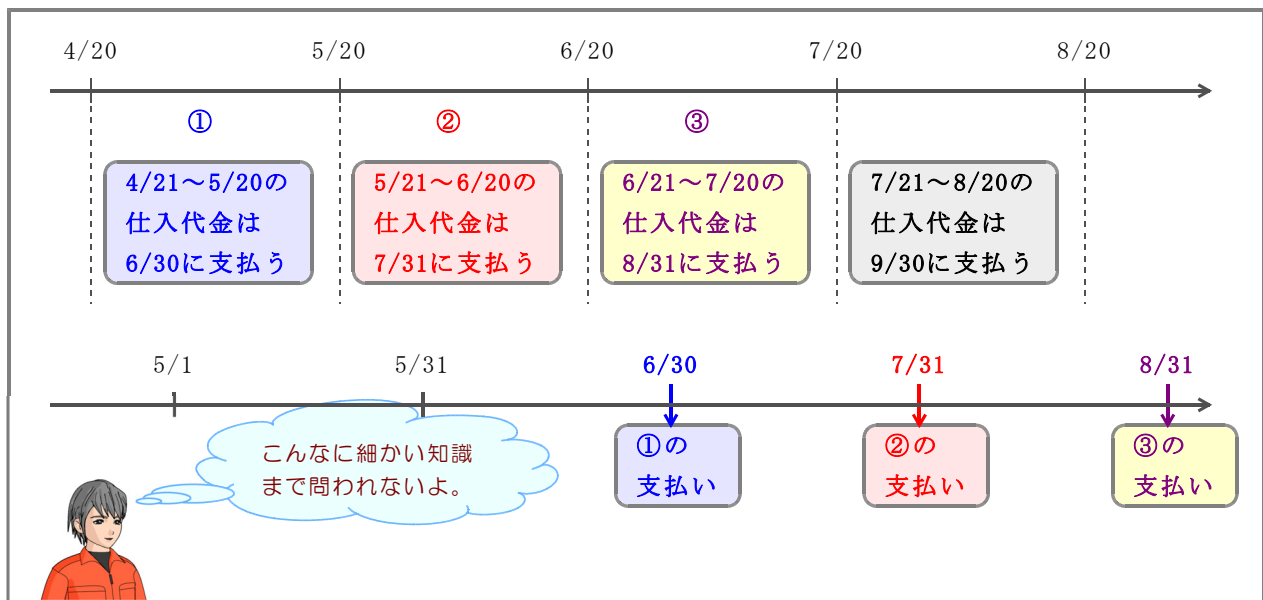
- (2) 商品の販売代金として現金を受け取った。これは、①150円/個で800個販売した代金である。



1-2 買掛金で仕入れ、売掛金で販売した場合

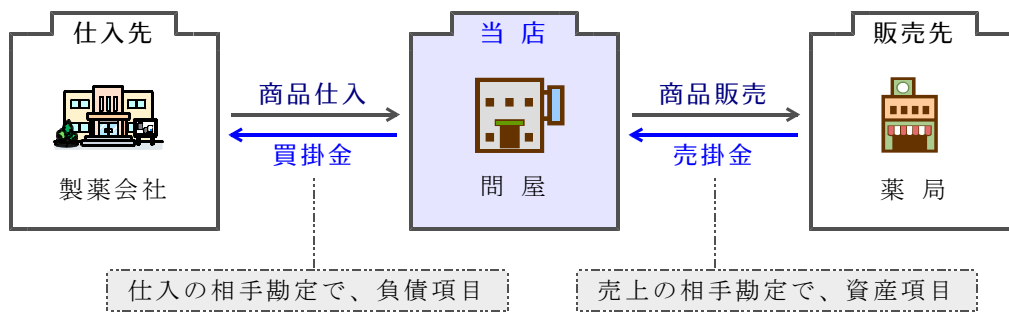
1ヶ月に何度も仕入れや販売を行う場合、取引の都度、現金で決済するのは煩雑です。そこで、取引先との間で、例えば、「前月21日～当月20日取引分の代金をまとめて、翌月末に決済する。」といった約束を交わして、毎月運用していきます。

例：仕入代金の支払い ～ 20日締め翌月末決済の場合



上の例では、5/10に商品を仕入れても、代金の支払は6/30です。現金勘定を変動させる仕訳は、現金での決済があった6/30に行えばよいのですが、会計では、「仕入」や「売上」の認識は、商品の引渡しタイミングで行うことになっています。そこで、5/10に商品の引渡しを受けているのであれば、5/10に仕入勘定を変動させる仕訳を行う必要があります。このとき、相手勘定として利用されるのが「買掛金」勘定です。

逆に、販売代金が商品の引渡し日ではなく、後日に入金される約束になっている場合には、引渡し日に「売上」を認識するために、相手勘定として「売掛金」勘定を利用することになります。



- (1) 5/10に商品を仕入れたが、その代金 100,000円の支払は6/30の予定である。

費用の増加		負債の増加	
(借方)		(貸方)	

- (2) 5/10の買入債務を決済するため、6/30に現金 100,000円を仕入先に支払った。

負債の減少		資産の減少	
(借方)		(貸方)	

- (3) 販売代金 120,000円は後日入金してもらう約定で、5/23に商品を引き渡した。

資産の増加		収益の増加	
(借方)		(貸方)	

- (4) 5/23の売上債権決済として、6/30に 120,000円が入金されたため、売上債権を取り消した。

資産の増加		資産の減少	
(借方)		(貸方)	

1-3 仕入れた商品を返品した場合、仕入れた商品に値引を受けた場合

仕入れた商品に、数量違いや品違い、あるいは破損や箱破れなどがあると返品する場合があります。また、返品するほどではないような小さな傷があった場合などに値引してもらう場合があります。**返品や値引は、仕入時の仕訳の貸借を逆にした仕訳（＝逆仕訳）を行うだけです。**

- (1) 100,000円で仕入れた商品が品違いだったため、返品した。

(借方) 買掛金	100,000	(貸方) 仕入	100,000
----------	---------	---------	---------

- (2) 100,000円で仕入れた商品に品質低下がみられたため、3,000円の値引を受けた。

(借方) 買掛金	3,000	(貸方) 仕入	3,000
----------	-------	---------	-------

※ 値引処理は、日商3級の試験範囲から除外されています。

1-4 販売した商品が返品された場合、販売した商品の値引を行った場合

販売した商品の返品や値引も、仕入の返品・値引と同様に、販売時の逆仕訳を行うだけです。

- (1) 120,000円で販売した商品が不良品だったため、返品された。

(借方) 売 上	120,000	(貸方) 売掛金	120,000
----------	---------	----------	---------

- (2) 120,000円で販売した商品は納期に間に合わなかったため、5,000円の値引を行った。

(借方) 売 上	5,000	(貸方) 売掛金	5,000
----------	-------	----------	-------

※ 値引処理は、日商3級の試験範囲から除外されています。

1-5 手付金 (= 内金) を前払いして、商品を仕入れる場合

商品の引渡しまでに時間を要する場合や、初めての相手と取引する場合などに、商品の引き渡しよりも前に、商品代金の一部を手付金 (= 内金) として授受することがあります。先に見たように、「仕入」や「売上」の認識は、商品の引渡しに行うため、引渡しよりも先行する現金授受の段階で「仕入」や「売上」を認識することはありません。

商品を仕入れる場合

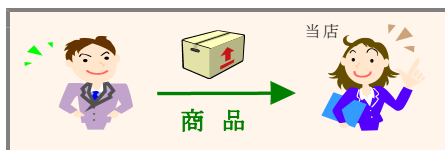


- (1) 8,000円の商品を仕入れる契約を結び、手付金 3,000円を現金で支払った。

資産の増加

資産の減少

(借方)		(貸方)	
------	--	------	--



- (2) 8,000円の商品を受取り、手付金 3,000円を相殺し、残額を掛けとした。

費用の増加

残額を掛けとした。

資産の減少

負債の
増加

(借方)		(貸方)	
------	--	------	--



- (3) 支払期日に、買掛金 5,000円を現金で支払った。

負債の減少

資産の減少

(借方)		(貸方)	
------	--	------	--

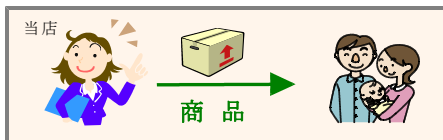
1-6 手付金 (=内金) を前受けして、商品を販売する場合

商品を販売する場合



- (1) 12,000円の商品を販売する契約を結び、手付金 4,000円を受け取った。

(借)		(貸)	
-----	--	-----	--



- (2) 12,000円の商品を引渡し、手付金 4,000円を相殺し、残額 8,000円を掛けとした。

(借)		(貸)	
-----	--	-----	--



- (3) 決済日に残額 8,000円を受け取った。

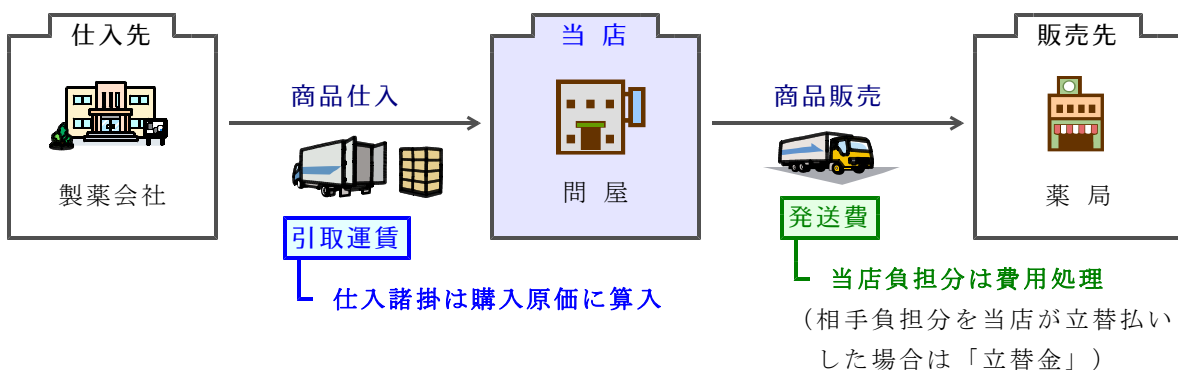
(借)		(貸)	
-----	--	-----	--

仕入や売上を認識するのは、
現金授受のタイミングではなく、
商品引渡しのタイミングなんだ



1-7 引取運賃・発送費

商品を仕入れる場合、商品の購入代価だけでなく、引取運賃や買入手数料、関税等の仕入諸掛が発生しますが、会計では、購入にかかるこれら付随費用を購入原価に算入することになっています。一方で、販売時に発生する発送費は当店が負担する場合には当店のコストになりますが、販売先が負担するものを当店が立替払いした場合には、立替金勘定で処理することになります。



- (1) 10,000円の商品を掛け仕入れした。この際、引取時に運送代 1,000円を現金で支払った。

(借方)		(貸方)	
------	--	------	--



(借方) 仕入	10,000	(貸方) 買掛金	10,000
(借方) 支払運賃	1,000	(貸方) 現金	1,000

- (2) 商品を 18,000円で掛け売りしたが、発送費 2,000円を現金で支払った。なお、当該発送費は、当店が負担することで同意している。

(借方)		(貸方)	
------	--	------	--

- (3) 商品を 18,000円で掛け売りしたが、発送費 2,000円を現金で支払った。なお、当該発送費は、相手方が負担することで同意している。

(借方)		(貸方)	
------	--	------	--

又は

(借方) 売掛金	20,000	(貸方) 売上 現金	18,000 2,000
----------	--------	---------------	-----------------

└ 売掛金も立替金も販売先への債権と考えることができるため、両者の合計額を「売掛金」としている。

仕入れたときの「引取運賃」は、
商品の取得原価に含めるのかあ



売り上げたときの「発送費」の処理も覚えてね。
当店負担の場合は「当店の費用」、
相手負担の場合は、「立替金」か「売掛金」よ。



2. 分記法による商品売買の仕訳

商品売買に関する仕訳には、3分法の他にも「分記法」が利用される場合があります。3分法では、「仕入」、「売上」、「繰越商品」の3つの勘定を利用しました。これに対し、分記法では、「商品」、「商品売却益」の2つの勘定しか利用しません。

- (1) 5/10に商品 100,000円を掛けて仕入れた。

3分法による仕訳

借方科目	金額	貸方科目	金額
仕入	100,000	買掛金	100,000

分記法による仕訳

借方科目	金額	貸方科目	金額

- (2) 5/23に仕入れた商品の全てを 120,000円で販売し、代金は掛けとした。

3分法による仕訳

借方科目	金額	貸方科目	金額
売掛金	120,000	売上	120,000

分記法による仕訳

借方科目	金額	貸方科目	金額

※ 分記法によると、期中仕訳の段階で、販売分の利益が適切に計上されるため、3分法のような「決算整理仕訳」(第5章P03、16)は必要ありません。

3. 商品売買の帳簿記入

設例 1

問屋を営むF商店の以下の取引について、仕訳を行いなさい。なお、F商店は12/31を決算日としており、使用する勘定科目は、次の通りである。

現金、売掛金、買掛金、資本金、売上、仕入、賃借料

- (1) 4/1に、現金 200,000円を元入れして営業を開始した。

(借方)		(貸方)	
------	--	------	--

- (2) 5/10に、A商店より商品Pを @100円/個で600個仕入れ、代金60,000円を現金で支払った。

(借方)		(貸方)	
------	--	------	--

- (3) 6/12に、B商店へ商品Pを @200円/個で600個販売し、代金120,000円を現金で受け取った。

(借方)		(貸方)	
------	--	------	--

- (4) 9/10に、A商店より商品Pを @110円/個で800個仕入れ、代金88,000円は掛けとした。

(借方)		(貸方)	
------	--	------	--

- (5) 9/22に、B商店へ商品Pを @210円/個で600個販売し、代金126,000円は掛けとした。

(借方)		(貸方)	
------	--	------	--

- (6) 11/30に、A商店への買掛金88,000円を現金で支払った。

(借方)		(貸方)	
------	--	------	--

- (7) 12/12に、B商店への売掛金126,000円を現金で受け取った。

(借方)		(貸方)	
------	--	------	--

- (8) 12/31に、C不動産へ店舗の賃借料(4/1～12/31分)72,000円を現金で支払った。

(借方)		(貸方)	
------	--	------	--

設例 2

設例 1 の資料を利用して、総勘定元帳、現金出納帳、商品有高帳への記帳を行いなさい。

3-1 総勘定元帳の作成

総勘定元帳は、仕訳をT勘定に転記していくイメージで作成します。

総勘定元帳

現 金

1

日付	摘要	仕丁	借 方	日付	摘要	仕丁	貸 方
4 1				5 10			
6 12				11 30			
12 12				12 31			

売 掛 金

2

日付	摘要	仕丁	借 方	日付	摘要	仕丁	貸 方
9 22				12 12			

買 掛 金

3

日付	摘要	仕丁	借 方	日付	摘要	仕丁	貸 方
11 30				9 10			

資 本 金

4

日付	摘要	仕丁	借 方	日付	摘要	仕丁	貸 方

売 上

5

日付	摘要	仕丁	借 方	日付	摘要	仕丁	貸 方

仕 入

6

日付	摘要	仕丁	借 方	日付	摘要	仕丁	貸 方

賃 借 料

7

日付	摘要	仕丁	借 方	日付	摘要	仕丁	貸 方

3-2 現金出納帳の作成

「現金」の入出金と残高を管理するために、「現金出納帳」を作成してみましょう。

設例1の仕訳のうち、現金の増減を伴うもの

4/1	(借方) 現金	200,000	(貸方) 資本金	200,000
5/10	(借方) 仕入	60,000	(貸方) 現金	60,000
6/12	(借方) 現金	120,000	(貸方) 売上	120,000
11/30	(借方) 買掛金	88,000	(貸方) 現金	88,000
12/12	(借方) 現金	126,000	(貸方) 売掛金	126,000
12/31	(借方) 賃借料	72,000	(貸方) 現金	72,000

現金出納帳

日付	摘要	収入	支出	残高
4 1	前期繰越	0		0
"	元入れ			
5 10	A商店より商品Pを仕入			
6 12	B商店へ商品Pを販売			
11 30	A商店へ買掛金の支払			
12 12	B商店から売掛金の入金			
12 31	C不動産へ賃借料の支払			
12 31	合 計			
"	次期繰越			
"				
1 1	前期繰越			

現金	
期首残高	首 0 円
	収入 200,000円 120,000円 126,000円
	支出 60,000円 88,000円 72,000円
	末 226,000円

この1年間で増加した現金

この1年間で減少した現金

12/31に残った現金

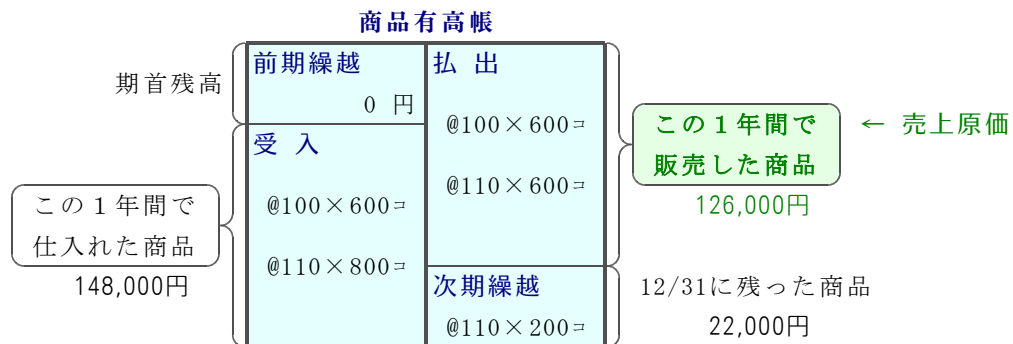
3-3 商品有高帳の作成

「商品」の受け払いと残高を管理するために、設例1の(2)～(5)の取引に基づいて、「商品有高帳」を作成してみましょう。

- (2) 5/10に、A商店より商品Pを @100円/個で 600個仕入れ、代金 60,000円を現金で支払った。
 (3) 6/12に、B商店へ商品Pを @200円/個で 600個販売し、代金 120,000円を現金で受け取った。
 (4) 9/10に、A商店より商品Pを @110円/個で 800個仕入れ、代金 88,000円は掛けとした。
 (5) 9/22に、B商店へ商品Pを @210円/個で 600個販売し、代金 126,000円は掛けとした。

商品有高帳

日付	摘要	受 入			払 出			残 高		
		数量	単価	金 額	数量	単価	金 額	数量	単価	金 額
4 1	前期繰越	0		0				0		0
5 10	仕 入									
6 12	売 上									
9 10	仕 入									
9 22	売 上									
12 31	次期繰越									
	〃									
1 1	前期繰越	200	110	22,000				200	110	22,000



(参考) 損益計算書のフォーム

損 益 計 算 書

売 上 高	246,000
売 上 原 価	126,000
売上総利益	120,000
販売費及び一般管理費	
賃 借 料	72,000
営 業 利 益	48,000

損 益 計 算 書

売 上 高	246,000
売 上 原 価	
期首商品棚卸高	0
当 期 仕 入 高	148,000
合 計	148,000
期末商品棚卸高	22,000
売上総利益	120,000
販売費及び一般管理費	
賃 借 料	72,000
営 業 利 益	48,000

3-4 先入先出法による商品有高帳の作成

3-3の設例では、商品を払い出したときに、残高欄には1種類の単価しかありませんでした。残高欄に複数の単価がある場合、どの単価で売上原価を計算するかについては、「払出仮定」の資料が与えられます。

3級で学習する払出仮定

- 先入先出法
- 移動平均法

ここではまず、先に仕入れた商品から先に販売されたと仮定する「先入先出法」に従って、「商品有高帳」を作成してみましょう。

- (1) 前期から @80円/個の商品が 200個繰り越されている。
- (2) 5/10に、A 商店より商品 P を @100円/個で 600個仕入れ、代金 60,000円を現金で支払った。
- (3) 6/12に、B 商店へ商品 P を @200円/個で 600個販売し、代金 120,000円を現金で受け取った。
- (4) 9/10に、A 商店より商品 P を @110円/個で 800個仕入れ、代金 88,000円は掛けとした。
- (5) 9/22に、B 商店へ商品 P を @210円/個で 600個販売し、代金 126,000円は掛けとした。

商品有高帳

日付	摘要	受 入			払 出			残 高		
		数量	単価	金 額	数量	単価	金 額	数量	単価	金 額
4 1	前期繰越	200	80	16,000				200	80	16,000
5 10	仕 入	600	100	60,000				200	80	16,000
								600	100	60,000
6 12	売 上				200	80	16,000	200	100	20,000
					400	100	40,000			
9 10	仕 入	800	110	88,000				200	100	20,000
								800	110	88,000
9 22	売 上				200	100	20,000	400	110	44,000
					400	110	44,000			
12 31	次期繰越				400	110	44,000	400	110	44,000
	〃	1,600		164,000	1,600		164,000			
1 1	前期繰越	400	110	44,000				400	110	44,000

商品有高帳

期首残高 16,000円	前期繰越	⑧80×200=	払 出	⑧80×200=	この1年間で 販売した商品 120,000円 ← 売上原価
	受 入	⑧100×600=		⑧100×400=	
		⑧110×800=		⑧100×200=	
				⑧110×400=	
この1年間で 仕入れた商品 148,000円			次期繰越	⑧110×400=	12/31に残った商品 44,000円

3-5 移動平均法による商品有高帳の作成

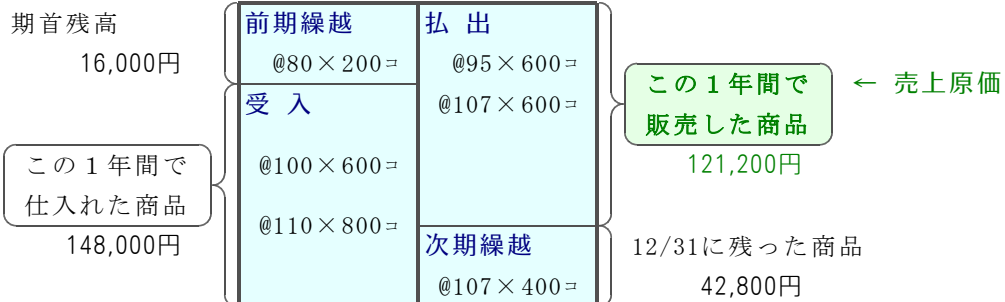
「移動平均法」では、残高欄にある商品の単価をそのときの数量で加重平均した加重平均単価を用いて売上原価を計算します。早速、「移動平均法」に従って、「商品有高帳」を作成してみましょう。

- (1) 前期から @80円/個の商品が 200個繰り越されている。
- (2) 5/10に、A 商店より商品 P を @100円/個で 600個仕入れ、代金 60,000円を現金で支払った。
- (3) 6/12に、B 商店へ商品 P を @200円/個で 600個販売し、代金 120,000円を現金で受け取った。
- (4) 9/10に、A 商店より商品 P を @110円/個で 800個仕入れ、代金 88,000円は掛けとした。
- (5) 9/22に、B 商店へ商品 P を @210円/個で 600個販売し、代金 126,000円は掛けとした。

商品有高帳

日付	摘要	受 入			払 出			残 高		
		数量	単価	金 額	数量	単価	金 額	数量	単価	金 額
4 1	前期繰越	200	80	16,000				200	80	16,000
5 10	仕 入	600	100	60,000				800	95	76,000
6 12	売 上				600	95	57,000	200	95	19,000
9 10	仕 入	800	110	88,000				1,000	107	107,000
9 22	売 上				600	107	64,200	400	107	42,800
12 31	次期繰越				400	107	42,800	400	107	42,800
	"	1,600		164,000	1,600		164,000			
1 1	前期繰越	400	107	42,800				400	107	42,800

商品有高帳



(参考) 損益計算書のフォーム

損益計算書

売 上 高	246,000
売 上 原 価	121,200
売上総利益	124,800
販売費及び一般管理費	
賃 借 料	72,000
営業利益	52,800

損益計算書

売 上 高	246,000
売 上 原 価	
期首商品棚卸高	16,000
当期仕入高	148,000
合 計	164,000
期末商品棚卸高	42,800
売上総利益	121,200
売上総利益	124,800
販売費及び一般管理費	
賃 借 料	72,000
営業利益	52,800